

# 学生による地域をつなぐイベント企画運営の効果と課題

采澤 陽子

## Effects and challenges of event planning and management by students to connect communities

Yoko UNEZAWA

### Abstract

This regional collaboration was planned to let university students know the joys and difficulties of working with the local community. The purpose was to let them know how to make use of the skills they have learned and the importance of adapting to the needs of others. Although the students were perplexed by their first experience of being involved in the planning and operation of the project, their awareness changed as the class progressed. The students were seen to take the issues seriously and to seriously consider possible countermeasures. They did not forget to make use of the joys and frustrations they gained from their practice the next time, and it was a moment of growth. It was a moment of growth, and we were very happy to see it. We will continue to watch over them. We will continue to make efforts to continue activities that lead to the growth of students in cooperation with the local community.

**Keywords:** Regional cooperation, Regional collaboration support project, childcare practice, learning outcomes, practical education, infant class, childcare experience

## 1. 研究の背景と目的

大学が地域と協働する「開かれた大学づくり」が求められて数年が経つ。本学も系列大学と共に地域連携を活用した様々な教育活動を展開することで開かれた大学としての役割を継続している。数年続ける中で、地域の幼稚園や保育園、小学校だけでなく市や企業などとも共同してイベントを行うなど繋がりができてきた。なかでも本学は保育者養成校であることから学生には乳幼児との関りや色々な年齢の方々との関りを持ち学ぶ機会としての役割も果たしている。

しかし、2020 年度から新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、大学ではこれまでに想像しえなかった規模での遠隔授業を実施せざるをえなくなった。実習も同様に学事として予定されていた

期間で実習を行うことが難しい状況が続くだけでなく、地域と協働することはもちろん、ボランティア活動も難しく学生が乳幼児と関わる機会が激減した。コロナウイルス蔓延以前は、1 年次に幼稚園と保育園、施設への体験学習の他に幼稚園や保育園でボランティアを行うなど、積極的に乳幼児と関わることで学生自身が乳幼児との関わり方を学んでいた機会をも逃したことになる。また、これまで大学と共同して行ってきた地域と連携した取り組みも難しい状況が続いている。この状況は本学学生だけでなくこれまで協働してきた地域の方々も同じであり、それぞれの学びの場が激減してしまっていることに懸念を感じていた。

こうした中、本研究は保育者養成課程における総合表現の授業において、学生が保育実践力を主体的に学ぶことができるような授業として地域と連携した教育を取り入れると同時に、学生の視点からみた

地域連携の効果も期待した授業展開を試みた結果を学生の学びや地域連携強化への期待を目的に検討することとした。

地域連携を通して、学生にとってどのような気づきや学びに変化があるのだろうか。このような取り組みを授業に組み入れることで保育実践力の向上や意識の変化を期待している。併せて地域との連携強化にも期待を寄せている。

本研究での「保育実践力」とは、保育に関わる課題を学生自ら設定しその探求を行うことを通して、課題と向き合うことのできる実践力とその土台となる専門的知識の獲得である。

## 2. 研究方法

本研究は、筆者が担当する総合表現ⅠとⅡ(2022年度2年次)の受講生を対象に、A市内のX公民館とY公民館の協力のもと保育実践を展開。受講生がどのように挑み、実践報告をまとめていく取り組み今後へ繋げていくのかを、取り組みの様子などをもとに考察を加える。公民館で開催した乳幼児学級イベントの参加対象者は乳幼児とその保護者である。

## 3. 授業の概要

今回公民館から依頼を受けた乳幼児学級イベントに対しての展開は、筆者が担当する総合表現ⅠとⅡの各15回、計30回は大学でいうところの卒業研究(ゼミ)に当たる授業を使って展開を行うことを前提に受講希望者を募った。事前に協力先であるA市内の公民館と担当教員とで打ち合わせを行い、内容を詰めていく中で本学の要望として『学生自身が保育実践の企画立案から運営、実践報告のまとめ発表までを実施する』までを想定していること、その中で学生にとってもいくつもの学びを得ることが考えられることを伝え公民館と折り合いをつけ、決定事項を授業初回で説明を行った。併せて一年間の研究計画とイベントまでの計画内容説明し、そのうえでゼミを希望した学生と協議してどのように活動を行っていくのかを検討した。検討した結果、活動は二人一組で行うことで合意し授業を進めることとした。乳幼児学級開催に向けてこの時点で決定していたこ

とは、対象が乳幼児とその保護者であること。親子で楽しめる内容であること、企画から運営まで学生が行うことのみであった。学生には、この一年の自分の目標と併せて、これまで学んだことを生かしつつ研究の一環としてレクリエーションを行うための目的として3つのことを課した。乳幼児学級を開催するにあたり必要と考える目的の一つは『こどもの成長などに関わる目的を設定する』こと、二つ目は『親子で楽しむ目的を設定する』ことである。そしてレクリエーションを行う中で『自分たち自身が一連の流れを行うことで何を学び、気づき、捉えることができるのか』という設定を3つ目の目標として入れ込むことを念頭に公民館への企画プレゼンテーションセッション資料の作成を検討させた。学生にとっては、企画書を作ることで体が初めてであったため企画書に必要な事項から相手が納得するような具体性の必要性であることなどを説明し資料作成に取り掛かってもらった。各々が企画した内容については、公民館にプレゼンテーションする前にゼミ内でプレゼンテーション内容を発表するなど、全員が全チームの内容を把握するだけでなく企画内容に対して質問や疑問をぶつけるなどを行う過程を経て改良を行ったものを公民館に発表する形をとった。各々が今できる考えうる企画書を持って公民館に出向き、プレゼンテーションを行った。企画内容について出た質疑内容に対し各チームがその場で改善が検討したり、持ち帰って再検討したいと要望したりするなどの意欲が感じられた。また、実際にイベントを行う会場を確認することも忘れることはなかった。今回のプレゼンテーションセッションでは企画内容の確認はもちろんだが、コロナ過であることから感染対策についての意見が多くあった。これまで行ってきた実習先での感染対策なども思い出しながら学生なりに意見を述べている姿に関心を覚えた。学校に戻りチームごとにプレゼンテーションセッションで確認できた修正点の洗い出しを行い修正作業に取り掛かる。併せてイベントのテーマ決定と、各チームのテーマや内容コメントの決定、並行して指導案作成を行った。行うことが山積みであるがどのチームも話し合いを進める中でお互いの考えや意見を出し合いながら行っている様子には少しずつではあるがイベントに向けて気が引き締まってきたように思えた。公民館に対して修正案のプレゼンテーションセッションをする間に学内で模擬保育を行った。模擬保育を行うことで企画者も参加者も

新たな発見や修正点に気づくことができている。指導案と企画内容を修正し、公民館への2回目のプレゼンテーションの準備を進めた。2回目のプレゼンテーションでは、実際に制作する試作品として模擬保育で制作したものを持ちながら当日の流れの説明を行うなど、1回目のプレゼンテーションよりもはるかに分かりやすい内容となっていた。そのことは公民館側へも伝わり、「各企画の内容や動きがとてもよく分かりました」という言葉を頂いている。前期15回の授業はここまでであったが、各チームがイベントに向けて夏休み中も準備を進めることとした。

後期に入り、イベントまで1ヵ月と迫っていたが学生を焦らせることなく一つずつ丁寧に仕上げるよう勧めていった。毎時間チーム毎の準備状況を確認しつつ、イベントの目的や目標の再確認をすることと併せて当日のスタッフ人数が足りるのかという点も伝えていった。本番前のリハーサルでは、まだ改善の余地があること、思った以上に準備に時間がかかることが分かり当日の動きを再度見直すこととなった。本番まで数日ではあるが学生達も参加者に楽しんでもらうために一生懸命準備に取り掛かっていた。本番当日も色々あったが無事に終わり、学生の安堵と喜びの笑顔は印象的であった。授業としては、この後、この一連の流れや学びを研究発表として発表する必要があるため学生個人としてのイベント振り返りの他、公民館の方々との振り返りも行い研究発表用資料制作に取り掛かった。各々がこれまで行ってきた活動内容についてまとめるわけだが、まずは自分たち自身で聞き手に伝えたいことをまとめる形で原稿を作成することとした。学生にとって多くの学びがあったため、伝えたい内容も多くほとんどの学生が発表時間10分に対して17分や18分と大きくオーバーした形で原稿が仕上がった。発表者が伝えたいことがしっかりと伝わる内容であったため、できることならそのまま発表したかったが発表時間は決まっているためどこを切り取るべきかを学生自身が悩み考えるよう指導した。ここから7分近く縮めるにはどの部分を削り、残すべきか。そのうえで相手に自分の思いや学びが伝わるようにまとめるにはどう表現したらよいかを学生自身が考え進めており、皆の意欲が伝わった。今回の地域連携を通して、学生自身が皆に伝えたいことが多くあることについてはとても喜ばしいことである。内容を削らせることとなり、嬉しい反面申し訳なさもあるが、

時間もあるためより伝えたい内容に絞り原稿の修正を行うよう指導した。卒業研究発表当日も、皆が自信に満ちて発表していたこと、質問に対してしっかりと自分の考えや思いを答えていた様子から、学生自身にとって一の自信となったのではないかと確信している。

#### 4. 地域連携実践の概要

本事業は、A市のX公民館とY公民館が乳幼児とその保護者を対象に年に数回開催している乳幼児学級において、本学学生と共に企画運営ができないかという依頼があったことから始まったものである。これまではプロの講演者を呼んでイベントを開催していたが、本学学生が地域で活躍していることを知り、話を持ち掛けてくださった。協議する中で、筆者の要望である学生発案のイベント企画としたいことを快諾いただき、乳幼児学級のイベントを開催することで地域と親子の連携だけでなく学生とも連携や繋がりを強化していくことも目的の一つであることもお互いの願いであることを確認し、話がまとまった。実際に公民館へ出向き学生が行った内容としては、①学生による企画プレゼンテーションと質疑応答、②改善案のプレゼンテーションと質疑応答、③リハーサル、④本番、⑤振り返りである。学生と共に公民館の方も約一年を通して準備を進めながら、多くのやり取りを行ってきた。学生にとっては貴重な経験となったであろう。次に実際に学生が公民館側で行ったできた内容の詳細を綴る。

公民館に向けたイベントを企画するのあたり意識した内容としては、対象である乳幼児とその保護者が一緒に楽しめることはもちろんであるが、そのほかに学生としての『こどもの成長などに関わる目的を設定する』ことと『親子で楽しむ目的を設定する』ことを目的とすることである。だが、さらに公民館の方からもA市の乳幼児学級についての考え方の参考として『子どもの発達段階に応じた育児と家庭環境に関する学習』『親子のふれあいと共通の自然体験、生活体験等に関する実技、実習』『家庭生活を楽しくするための知識や技術に関する学習家庭生活を楽しくするための知識や技術に関する学習』なども念頭に進めていただきたいと要望があったため、その点も意識しながらの企画立案となった。学生に

とっては初めての企画制作であるため、これまで考えたこともなかった予算や当日までのスケジュールなど、色々なことを意識しながらの企画検討であった上に、相手からの要望も組み込む必要があるため混乱した様子もみられた。しかし、二人で意見を出し合いながら進める姿はとても頼もしく見えた。また、この企画が通らなければイベントそのものが開催されないこともあり、取り組む姿勢もプレゼンテーションする姿勢も常に真剣であり、誠意が見られた。プレゼンテーション前は緊張の様子が隠せなかったが、堂々とした発表に筆者自身も驚いたくらいである。公民館からの質疑応答に対しても、自分の考えや意見を踏まえて答えており、イベント開催に対する意欲が出ている様子が伺えた。公民館で開催したプレゼンテーションの様子を図1、2 図3で紹介する。

第1回目のプレゼンテーションを終え、公民館からいただいた的確なアドバイスや意見は学生にとって刺激になったようで企画内容の見直しや修正を行う際もチームでの話し合いがよく見られた。企画修正案をもとに指導案を作成し第2回目のプレゼンテーションを前に模擬保育を行った際も、頭や紙面で考えていた内容から実践を行ったことで新たな課題や発見を見出すことができていた。さらに修正を加え、より相手に分かりやすい内容とするための企画内容にも修正を行っていた。少しずつ実践への自信も付け、第2回目のプレゼンテーションに挑んでいた。第1回目のプレゼンテーションでは用意していなかったイベント内容の見本を用意しながら説明するなど、より詳しく解説ができたことで相手への信頼や内容の確信や納得に繋げることができていた。この段階で内容についてはほぼOKが出ていたため、本番前のリハーサルに向けチーム毎に準備を進めることとなった。平行してイベントのチラシ作成も行ったが、こちらは一人の学生がチラシ制作を申し出てくれたためその学生と筆者、公民館と連携してチラシ制作を進めていった。チラシ制作の際も学生は参加者が増えるように見栄えや内容理解についても意識している様子が伺えた。

後期に入りイベント本番まで残り1ヵ月となったころには、各チームが入念な確認と準備を進めながらイベントの目的や目標の再確認を行うなど、本番に向けた準備が着々と進んでいく。



図1. プレゼンテーションの全体の様子



図2. プレゼンテーションの様子



図3. 質疑応答

今回の乳幼児学級イベントで行う内容を紹介すると、企画は企画依頼の基となった『竹あかり』の他に4つの内容が出そろった。初めに参加者全員と交流を図れるように全員参加する『きつつきさんとひみつきち』と題したアイスブレイキングを行い、その後4つのコーナーに分かれて制作や遊びを行うコーナーを設けた。各コーナーでは『竹あかり』の他に、『オシャレなかぼちゃバッグ作り!』と題して紙皿を使ったバッグを制作し作ったバッグを手

写真撮影コーナー、『たのしく遊ぼう！的当てゲーム』と題して各自が紙コップで作った的を使った的当てゲームコーナー、『ちびっこトレジャーハンター』と題して輝く折り紙で宝石を作るがその宝が海賊に取られてしまい参加者全員で宝を探し出すという制作とゲームを交えコーナーなど、どれも制作だけでなく作ったものを生かして遊ぶことを考えた展開も用意することでより楽しめる工夫を行っていた。

各コーナーの様子を見ると、紙皿を使ったバッグ制作では絵を描くだけでなくハロウィンをイメージした型を用意していたため、こども達が絵を描くこと以外に選び貼り付けることの楽しみを見出していた。制作後に記念撮影ができるスペースを用意し撮影スポットを作ったことで、親子で記念撮影をしている様子が多く見られた。紙コップ的当てでは自分で作った的の的として見立て、新聞紙ボールを当てるゲームを行ってしたが、こども達は的に当てることに一生懸命になりだんだんと的に近づいていた。保護者もその様子をニコニコと笑いながら撮影していたため、親子で楽しめていたことが実感できた。折り紙ダイヤモンドは作ったダイヤモンドを海賊が隠してしまい皆で探すという遊びだが、まずこどもや保護者がキラキラした折り紙に心を奪われていた。いつまでも折り紙をひらひらさせてキラキラと輝く様子を見ているこどももいた。宝を折るのは難しかったが、その後の宝探しではこども達が大きな声で笑いながら全力で宝探しをしている姿が見られ保護者の見守るようなあたたかな表情は印象的であった。どれもこども達が全力で参加している様子が見られただけでなく、保護者はもちろんであるが学生の笑顔も印象的に残っている。

当日の参加者は20組65名で、内訳は0歳～8歳までのこども41名と大人24名である。募集したのは幼児であったが、兄弟姉妹も共にということで年齢層が広がった。当初の企画よりも年齢層が広がったことで企画内容に一部修正が必要となったが、大きな変更も無く学生達は着実に準備や対応を進めていた。イベントの様子を図4～9に示す。

イベント終了後、後日ではあるが振り返りを行った。まずは学生自身がイベント当日と内容について振り返り、それを基に公民館の方と振り返りを行った。振り返りでは事前にたてた目標やねらい、今後についても触れており各自が何を振り返り次に繋げたらよいかが考えられていた。公民館との交流はここまでであるが、多くの学びを得たのではないかと

思う。公民館での学生イベントは初めてであったため、地域の3つのメディアから取材を受けている。メディアに対してこれまで準備してきたことをしっかりと伝える様子は堂々としており頼りになる様子が伺えた。実際の記事やケーブルテレビで放映された内容を授業内で公開すると学生達は恥ずかしがりながらもとても喜んでいていた。



図4. アイスブレーキングの様子



図5. バッグ制作の様子



図6. 的当てのゲーム様子



図 7. 折り紙制作の様子



図 8. 宝探しの様子



図 9. 竹あかり制作の様子

## 5. まとめ課題

イベントの企画からプレゼンテーション、リハーサルに本番と学生にとって全てが初めての体験であったこともあり、皆が一つひとつ確認をしながら進める様子が伺えた。物事を進めるにあたり確認することの必要性を一つ目に学べたのではないだろうか。また、これまで授業内で発表やプレゼ

ンテーションを行った経験はあるが外部の方に実際にプレゼンテーションした経験は無いため、学生にとってはよい緊張感が経験から学べたのではないだろうか。企画内容について出た質疑内容には学生が思いもよらない指摘があったが、各チームがその場で改善が検討したり、持ち帰って再検討したいと要望したりするなど意欲が見られるなど、学生自身も自分たちの言動に驚きを隠せなかった。そもそも企画内容について教員はあまり口をだすことをせず、なるべく各チームが考えた内容を公民館側にもんでもらうことを意識した。なぜなら自分たちが考えている内容が外の人にはどう思われるのか、思いは伝わるのかということも心と体で感じてほしかったからだ。そこからの学びも大きいものであると教員としては思っていた。実際にそうであったと認識している。また、模擬保育を行ったことでの気づきや発見は大きかったと思っている。その後も実践しながら進めていたため納得いくまでの時間が早かったように感じる。そして、イベント当日の親子を迎える姿勢や自分たちが企画した内容については堂々とする姿が見られたが、周りを見て臨機応変に対応する姿は少なかつたように見えた。それでも笑顔を決やさず、優しい声掛けをしている姿は保育者として必要な要素が備わっているように思えた。学生達自らがイベントでの良かった点や改善点を見出し、次に繋げようと意欲がでていたことも学生自身の変化に繋がっていると捉えた。

その他にも、多くの学びと経験をしたことでついた自信は宝であるため、今後も色々なことにチャレンジしてほしと願っている。これは今後保育の現場に限らずどの社会でも必要なことであるため引き続き行ってほしい。日々進化する社会にあっても、基本的な技術取得の必要性に関しては変わることは無い。また、今回の学びは保育の現場だけでなく、色々なところで活かせる内容として、保育実践力に繋がったと捉えている。また、学生の振り返りからも、自ら良かった点や反省、課題を見出し探求していく姿勢が見えたこと、地域と連携していくことの難しさや必要性についても捉えていたことなどから、当初立てた授業の目標に繋がったと捉えられる。卒業してからも一連の経験を生かした活躍を期待している。

筆者としても授業で取り入れた内容としては多くのことが初めてであったため、多くの気づきや改善が必要であると感じた。筆者自身の課題としては、

リハーサルの様子から本番への不安があったにも関わらず学生の頑張りに任せてしまった点である。学生自身も反省としてあげていたが、本番の途中で言葉が出ず空白の時間ができてしまった点は練習不足以外のなにものでもない。もう少し学生と共に作り上げることも必要であったのではないだろうか。今回、地域と連携して行ったこと全てが多角的にとらえても重要な要素であることは確実であるため、引き続き協力していけるよう努力を続けていきたい。

保育と教育—東京未来大学保育・教職センター  
—紀要—特別号, 101-109, (2017)

謝辞

ご多忙にも関わらず、快く学生の活動と学びの場を与えてくださった X 公民館 H 氏と Y 公民館 U 氏に感謝いたします。

## 引用・参考文献

- 1) 湯地宏樹：地域連携事業に係る授業における学生の満足度と保育実践力，鳴門教育大学学校教育研究紀要第 30 号，85-94，(2016)
- 2) 宇津木七実：保育者養成校における『『アート表現』の指導法』の学びについての一考察，関西女子短期大学紀要第 31 号，7-14，(2021)
- 3) 新實広記：保育者養成課程における地域連携を活用した造形表現科目の授業改善—保育実践力の育成を目指した取り組み—，東邦学誌第 43 巻第 1 号，121-129，(2014)
- 4) 江村和彦：地域と連携した保育実践報告，～造形あそび，工作体験を中心に～，日本福祉大学全学教育センター紀要第 8 号，63-68，2020
- 5) 柴田 卓，伊藤哲章，早川 仁，古川 督，猪俣照子，仲西真美子，三瓶令子：保育者養成校における地域連携に関する研究～学生の学びと喜—貢献に着目して～，郡山女子大学紀要第 53 号，207-224，(2017)
- 6) 金子智昭：保育者養成校における地域連携授業の学習効果に及ぼす協働作業認識と課題価値の影響—交互作用に着目して—，哲学 (Philosophy), No.145, p.285-312, (2020)
- 7) 金子智昭：保育者養成校における地域連携授業に関する実践的研究—学生の省察が自己認識の変容に及ぼす影響—，社会学研究科紀要, p.131-144, (2019)
- 8) 森下一成：地域連携による若者世代の社会教育利用促進施策に関する一考察—渋川市中央公民館における「ジブンと社会をつなぐゼミ」でのキャリア教育の実践と課題—，未来の

